

## 板倉勝宣著『山と雪の日記』

1年程前、時々覗く山の本屋、お茶の水の茗溪堂でこの本の覆刻版を見つけ、リタイアして火の車に乗っている私には些か躊躇される値段であったが衝動的に買ってしまった。黒一色の表紙に銀箔のエーデルワイスが新鮮で懐かしかった。

この本を最初買ったのは40年以上も前で、場末の古本屋の埃だらけの土間に積まれていた。昭和5年梓書房発行のこの本は、当時でも古本相場は結構高価であったと思うが、貧乏学生の分際でも買えたのだから、その古本屋のオヤジは山の本の相場に疎かったのか或いは貧乏学生を憐れんで二束三文で売ってくれたのかもしれない。

板倉勝宣は、大正12年冬、榎有恒、三田幸夫と共に立山温泉から弥陀ヶ原を目指したが、猛烈な吹雪に阻まれて退却する途中の松尾峠で若くして遭難死。彼の遺稿を友人達が編んだのがこの本である。遭難の事情は榎有恒の『山行』(「板倉勝宣君の死」)や三田幸夫の『山なみはるかに』(「松尾峠の不思議な幻影を思い返して」)に詳しいが、風雪下での3日間にわたる彷徨と幻覚に苛まれたビヴァーク、救援依頼のため三田の必死の脱出行、やがて訪れた板倉の最後など、このアルピニスト3人を結ぶ友情には目頭が熱くなるのを覚える。

三田は救援依頼にスキーで下る途中、レンガ塀の幻覚に遮られて前進できず、これでいよいよ最後と思った時、彼らが山でよく歌っていたという歌の一節を思い切り歌ったが、その時瞬間的に雲が晴れて星の瞬きが見えたと回想している。「夢にならずみて眠る愛児(トシコ) 照る日に風に鳥ぞ汝が友 光かくろい風吹き去りて 鳥は野末の森に帰りぬ 鳥よ何処に彷徨(サマヨイ)行ける 星住む郷か はた海の面か」。丁度その時刻、板倉は横に看取られて星住む郷に旅立ったのだった。

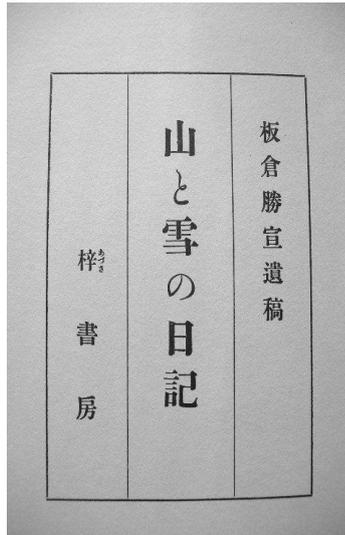
大正時代といえ、1世紀近くも前のことで、近代アルピニズムが定着してきた時期とはいえ、まだまだ登山は一般的ではなかった。板倉は得意な外国語を駆使して、ヨーロッパ最新の登山技術や山スキー技術を紹介し、当時の登山界をリードした一人でもあったそうであるが、この本に書かれてる随想は、そのような堅苦しくて先鋭的な内容はともかく、のびやかで何とも優雅な往時の登山の様子が偲ばれて興味深い。登山が極く一部の特権階級の独占だったにせよ、「〇〇ツアーご一行様、只今お着き〜」という現今の山の世相とついつい比べてみたくなるが、これも詮方のないことであろう。

私事で恐縮であるが、古本屋で買ったこの本の初代は、しばしば僅かな借金と引き換えに人質に取られた。新入社員の頃、給料日前には食うに困り、この本と他の2、3冊を古本屋に預けて口を糊したものである。当時は古本屋にも質屋の機能があって、期限内に元利を持って行けば請け出せたものであった。僅かな貸し金ではあったが、安屋台なら二晩くらいは御神酒を楽しめた。給料が入ると請け出し、給料前になるとまた質入れするという、この本にとっては何とも可哀相で情けない人生(“本”生?)であったが、いつの間にか流れてしまった。下宿していた近くの中央線沿線の阿佐ヶ谷駅前通り商店街の古本屋であった。

今は昔、山岳博物館の片隅で埃を被って佇んでいるジオラマ爺さんの繰り言でありました。

1930年 梓書房刊。

(2004年2月 記)



(扉)



(表紙のエーデルワイス)